

# ニュージーランドの成人教育

神 田 嘉 延

鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要

第 9 卷 抜 刷

1999年11月

# ニュージーランドの成人教育

## Adult Education in NEW ZEALAND

神田 嘉延\*  
(Yoshinobu KANDA)

キーワード：中等教育での成人教育、地域ボランティア活動による成人教育、  
コミュニティラーニングセンター、生涯学習、地域生活

### 目 次

はじめに

#### 第1章 中等教育と成人教育

- (1) 成人教育における中等学校の位置
- (2) クイーン・エリザベス・カレッジの実践
- (3) ハングレイ・コミュニティ・カレッジ

#### 第2章 地域ボランティア活動と成人教育

- (1) ニュージーランドの福祉の現状とボランティア
- (2) クライストチャーチのコミュニティハウス
- (3) パーマストンノース市のオープンラーニングセンター

#### 第3章 コミュニティラーニングセンター

- (1) コミュニティラーニングセンターの成人教育での位置づけ
- (2) コミュニティラーニングセンター形成の歴史的経過  
－フィールドングの事例－
- (3) フィールドングラーニングセンターの活動の現状
- (4) ワンガヌイ市のコミュニティ教育サービスセンター

### はじめに

ニュージーランドの成人教育は中等学校の地域教育施策のなかで、歴史的に発展してきたところに特徴があります。この意味では、コミュニティスクールの発展として成人教育制度が展開されてきたのです。中等学校との関係において、成人教育は教育省との関係をスタッフと予算の面で保障されてきたのです。

そして、スタッフも教育の専門職として位置づけられてきました。しかし、独自に成人教育予算が学校と離れて保障されてこなかった側面から学校教育のようにフルタイムのスタッフとして身分がきちんと保障されてきたものではなかったのです。歴史的に、それはパートタイム的な位置づけが支配的であったのです。

一方、コミュニティの社会福祉活動、ボランティア活動と結びついて、成人教育が展開されてきた側面もニュージーランドでは、大きな位置もっています。アジア・南太平洋諸島から移民してくる人々を対象にして発展してきたESOLという組織、持続的発展の社会をめざすとくみを積極的に展開する労働者教育協会、地域のボランティアセンター、地域の識字教育協会、地域のエスニック会議、地域による障害者の支援グループなど様々な団体やグループが地域サービス活動と結びついて、学習活動を展開しているところです。例えば、人口7万5千人のパーマストンノースには、市が中心になって財政的に支えている地域サービスのボランティア会議の組織に62の団体・グループ組織が登録されています。

教育省の成人教育の施策として、中等教育学校などで展開する地域の成人教育の予算の15%は、ボランティアの学習活動にすると指示しています。また、ESOLのように、独自にコーディネーターや施設の予算を教育省が組んでいる場合などもあります。

パーマストンノースの市役所の教育政策として、1995年に発表された冊子がありますが、ここでは、市の機関が実施する成人教育として、美術館、図書館、博物館の公開学習会をあげています。

\* 鹿児島大学教育学部学校教育（教育学）

また、地域のボランティア団体による学習、全国組織の地域活動による学習、成人教育を指定された高等学校の成人教育をあげています。またインフォーマルな地域成人教育の部門として具体的事例としてあげています。成人教育と市の一般行政は、ボランティア団体などによる成人教育活動のなかで、教育省との成人教育活動との接点をもっているのです。

本論では、ニュージーランドの成人教育を地域の生活を中心としながら中等教育学校の成人教育、ボランティア活動と成人教育、コミュニティラーニングセンターの実践活動を明らかにするものです。

とくに、フィールデングのコミュニティラーニングセンターを、ニュージーランドの成人教育の歴史的展開のなかで重視しました。本稿では、紙数の制約からコミュニティラーニングセンターの簡単な紹介にとどめました。詳しくは、鹿兒島大学教育学部紀要教育科学編1999年度版(2000年3月発行)に掲載するので参照してください。

## 第1章 中等教育と成人教育

### (1) 成人教育における中等学校の位置

通信教育制度と並んで、ニュージーランドの成人教育で大きな役割をしているのは、各地域にある中等教育学校です。都市部では、すべての中等教育学校で成人教育が行われているわけではなく、特別に指定された中等教育学校が成人教育部を設けて組織的な成人教育のプログラムをつくり、講座ごとにチューターを委嘱しています。

また、農村の中等教育学校では、成人教育のセクションが学校教育の経営組織のなかに設けられ、地域の成人の教育機関として大きな貢献をしています。ひとつの地域にひとつ以上の成人教育機関を設けるという方策のもとに、中等教育学校に成人教育のセクションが意識的に設置されていたのです。

夜間の短期の学習講座ではなく、成人が中等教育のフルタイムの生徒になって教育を受けることも積極的にやられています。これは、昼間の時間に若い生徒と一緒に学習する制度です。成人に高等学校卒業の資格や高等学校での社会的資

格をとらせていくということです。

ニュージーランドでは、いくつになっても自由に学校教育を受けられるしくみとして、成人が中等教育学校での生徒として教育を受けているのです。例外的に、中等教育学校の成人教育に替わってポリテクニックがやっている地域もあります。

### (2) クイーン・エリザベス・カレッジの実践

パーマストンノース市では、クイーン・エリザベス・カレッジという中等教育学校が、成人教育を積極的に展開しています。歴史的に、この中等教育学校は、1903年に設立されたときは、夜間の職業教育に力を入れた中等教育学校として出発したのです。現在の生徒数は、昼間と夜間を含めて700名です。昼間の生徒数のなかにもフルタイムとしての成人の生徒が含まれています。

19歳以下の生徒は、フルタイムの学生として、一般の中等教育学校と同じように、カリキュラムがくまれて、週25時間の授業を受けなければならないようになっています。すべての生徒に英語、数学、科学が義務づけられ、大学入学資格のパーセリーのために5つの科目を自由に選べるようにカリキュラムが準備されています。成人の生徒は、自分の必要なプログラムをフルタイムか、または、パートタイムで選びます。フルタイムには、5つのコースを選ぶことができます。

そして、中等教育段階での学校教育の卒業資格は、ニュージーランドでは国家試験になっているために、その卒業資格を成人になっても、とれるようにそれぞれの段階、コースごとの教育を積極的に展開しています。

成人の教育のためには、いつでも学習者の援助ができるように、教師と相談員がみつけれられるしくみになっています。ニュージーランドでは20歳以上の成人は、特別の大学入学資格がなくても、個々人が大学の学習についていけるかどうかという判断によって、学べるしくみになっています。

中等教育の卒業資格は点数をつけて、国家試験として実施しているのです。成人も、その試験を受けて、社会的に能力が評価されるのです。

職業につくための専門的な職業教育機関として、ポリテクニックという高等専門学校がありますが、そこは費用が大変高く、中等学校の成人教育

の11倍近くの授業料をとっています。むしろ、ここで、成人が中等教育を受けているのは、子どものときに、あまり勉強しなかった人が、大人になって、勉強しようとするための教育機関です。

中等教育学校の成人教育は、目先の職業訓練的な専門教育ではなく、職業教育や、文化や趣味も含めて広い教育をねらいとしているのです。また、成人と一緒に勉強している若い青年も学習の意味を成人との日常的な学びの交流のなかで、直接的に理解していくのです。

ここでは、ニュージーランドで生活していくうえで必要条件である英語を成人に積極的に教えています。政府の施策として、中等教育で成人教育を実施していくうえで、必ずしなければならないことは、識字教育、生活していくうえでの数学教育、ボランティア活動教育と3つの分野が義務づけられています。

識字教育では、ニュージーランドで生活する外国人が主な対象になっています。外国人がニュージーランドで生活していくために必要な英語教育を積極的に展開しているのです。この学校では、26の外国人が英語を勉強するために、入学してきています。日本からも若い高校生も英語の勉強のために留学しています。

夜のコースでは、ハイスクールなどの国家試験による卒業資格を得るための学習コースばかりでなく、教養や趣味のための学習も積極的に用意されています。最低10名の受講希望があれば、講座を開くことにしています。

外国語コースは、フランス語（レベル2まで）、ドイツ語、日本語、イタリア語、ロシア語、マンダリン語（中国語）サモア語、手話（レベル3まで）、スペイン語（レベル4まで）をしています。とくに、スペイン語の講座はレベル4まで行って、大学教育並の水準として高く評価されていると学校側はのべています。さらに、コンピューターの様々なレベルのコースが設定されています。

レジャーコースとしては、ジャズの基礎（レベル2まで）、ジャズワークショップ、作文、家庭経済、ギター、音楽、写真、哲学入門、政治状況などの講座が開かれています。

クラフトコースは、木工（レベル2まで）、カーテン、装身具類、家具、理髪、趣味の機械工作、室内装飾などを行っています。料理教室として、中国料理、インド料理、野菜料理、ケーキづくり、ハーブ料理、パンづくりなどです。

また、芳香療法、安全と健康、会話、作文、耳のきこえない成人の英語、マッサージ、自然療法、美容、ヨガ、女性自身の弁護など人間に関するコースを開いています。そして、家の修理や庭の講座として、ペンキ、内装のデザイン、池、花の芸術、庭のデザインなどの住居関係の講座が準備されています。芸術コースでは、書道、デッサン、陶芸、詩、絵画などなどが設定されています。

これらの成人教育の講座は、3ヶ月から半年位のコースが多く、25ドルから60ドルの授業を支払うようになっています。

中等教育学校の成人教育で、20歳前後の青年を対象にした教育に力を入れていかねばならないとクイーン・エリザベス・カレッジの成人教育の担当の責任者はのべますが、現実には、なかなか受講する青年が少ないともらします。

学校教育でドロップアウトした青年は、現実的に就職も難しく、積極的に就職に結びつくような職業訓練的な教育を実施しなければならないのではないかと、成人教育部の担当責任者は語ります。この意味で、ポリテクニクや地域にあるマッセイ大学との連携が必要であると強調します。

クイーン・エリザベス・カレッジは、5000時間の成人対象の特別のコースの講座を設けていますが、政府から、その時間を基準にして予算がだされるしくみになっています。この特別の成人教育講座は、すべてパートタイムの授業であり、講師はパートタイムで担われています。

教育改革のなかで、全体をマネージする責任者と事務員はパートの身分になりました。マネジャーは、週2日で年間40週間の賃金しか政府から支払われないのです。事務員は、毎週25時間で週40週ということ、人的な面からの継続的、系統的に特別の成人教育を組織していくには、難しさがあるようです。生活していくための賃金が、専門的な成人教育のマネジャーに支払うことがされ

ていないのです。ここには、現在の成人教育予算をめぐるニュージーランドの厳しさが反映されているようです。

中等教育学校での予算の15%は、地域の成人教育組織に支出しなければならないということで、クイーン・エリザベス・カレッジでは、地域の民間ボランティアの学習など、14の地域組織に財政的な支出をしています。それぞれの地域のボランティア組織などは、様々なルートで組織の資金を集めていますが、中等教育学校からの資金援助は、自らの組織が行う学習活動の資金として大きな役割を果たしているのです。

中等教育学校の裁量権で地域組織の資金援助ができますので、クイーン・エリザベス・カレッジでは、現状の5000時間の教育省からの予算配分のうち、1000時間分が可能の範囲であるとしています。中等教育学校の成人教育を充実していくには、予算的な側面の制約がありますので、寄付金やスポンサーの工夫をしないかねばならない状況にきていると担当者は語ります。

### (3) ハングレイ・コミュニティ・カレッジ

ハングレイ・コミュニティ・カレッジは、クライストチャーチ市にある中等教育学校です。1873年に西クライストチャーチハイスクールとしてスタートした伝統ある学校です。そして、地域の青年のための学校としてばかりでなく、成人の教育施設としても発展してきたのです。

この中等学校は、成人と若い生徒たちが共に学習してきた歴史ある中等学校なのです。母親の中等教育の機会を保障するために、保育園までも学内に設備されている学校です。そこでは、0歳から5歳までの幼児教育の施設も兼ねています。学校はすべての年齢を対象にした学齢11から学齢13までの学習を実施しています。スタッフは133名もいる大きな中等教育学校です。

ここでは、大人と若い生徒が同じ教室で学んでいるのです。また、外国人や移民してきたひとたちのために英語教育をしています。この他に、昼間のクラスで特別の講座を設けています。芸術、商業、コンピューター、マオリ研究、教育心理、科学、グラフィックテクノロジー、社会科学、家庭経済、数学などが設けられています。

以上の様々なコースに、1000人の成人が学んでいます。成人は、学齢12で49の科目を選び、学齢13年では、37科目を選択しています。そして、23のクラスになっているのです。

中等教育学校として、学齢9と学齢10の若い生徒たちを教育し、学齢11の成人と共に学習クラスに連結しています。学齢11から13のコースは、60%が成人の生徒になっています。生徒はフルタイムとパートタイムをあわせて1700人になっています。また、成人教育ばかりでなく、13歳から19歳の留学生を受け入れ、特別の英語教育を実施しています。かれらは、フルタイムの学生として学習できるように、カリキュラムが準備されています。また、マオリの言語や文化を学ぶコースも設置されています。

この学校を卒業して、40%近くが大学、40%がポリテクニクという高等職業専門学校に行きます。つまり、この中等学校の成人教育は、継続して上級の学習コースに進んでいるのが特徴です。

夜の成人の講座には、3000名の生徒が、年間学んでいます。毎週2時間から3時間学んで、1年間とおして、ハイスクールの卒業資格などの国家試験のための学習をするコース、手話のコース、英語のコースがあります。

8週間コースとして、毎週2時間学ぶ、写真、コンピューター、クラフト、料理、健康、庭の手入れ、音楽などがあります。それぞれ、40ドルから70ドルの授業料が設定されています。

ハングレイ・コミュニティ・カレッジは、クライストチャーチ市民と周辺住民の成人教育機関として大きな役割を果たしているのです。成人教育施設が中等学校の機能のなかにくみこまれて実施しているのが特徴的です。

## 第2章 地域ボランティア活動と成人教育

### (1) ニュージーランドの福祉の現状とボランティア

世界一の高度な福祉国家として知られていたニュージーランドは、一九八〇年代からの新自由主義による規制緩和、競争主義、自己責任主義ということで、社会権として、国家責任の社会保障制度は、資本主義的自由市場原理による民営化路線

に大きく変わっていきました。社会保障の国家的役割は大切な側面ですが、民営化路線が進むなかで、社会的弱者や貧困問題の対応にボランティアなどの非営利の社会的協同セクターの広がりも生まれてきています。

ニュージーランドでは、施設収容主義的な福祉から地域社会での福祉ということで、地域主義が変わっていきました。例えば、DP児（心身に機能的なハンデキャップをもつ子ども）を地域社会で普通の家族として生活するように変わっています。そして、DP児の家族がかかえる困難性を地域社会が支援していくように変わってきています。

それは、短期間ケアをしてもらおう公的なグループホームによる家族支援システムと、ボランティアがDP児を家族の一員として一時的に受け入れるものと2つのタイプがあります。高齢者福祉についても隔離的な老人ホーム施設ではなく、地域のなかで生活していけるような高齢者の個人住宅が地域的につくられ、それぞれの状況にあわせてケアしていくように配慮がされています。

しかし、この地域主義の高齢者福祉の施設も民営化のなかで行われていることによって、高額になり、また、経済の厳しさのなかで家族も忙しくなり、一部には、家族から離れた特別の安全性を保障する地域施設になっていく傾向が生まれています。医療や強盗からの防衛など、あらゆる面で安全性を保護してくれる地域主義的なコロニーの施設に入るには、カードによる厳格な管理が行われ、高い壁に囲まれ、鉄条門がそのうえに張り巡らされた施設になっているのです。失業者の増大のなかで治安の問題が新たに生まれ、高齢者の暮らしに大きな影響を与えています。

失業のない経済の安定と、地域のなかで高齢者が共にくらすようになるには、地域社会が安全であり、地域住民が時間的にも経済的にも余裕をもった生活をして、誰でもが声をかけあっていく地域コミュニティ、地域の相互扶助が前提にされていかなばなりません。現在のニュージーランドは、経済的な状況が厳しいなかで、この条件は整っていないようです。それでも、ボランティアが社会的な大きな役割をもって発展しています。現実には、地域福祉を支える様々なボランティアが

要請されてきているのです。あらたに、社会的な非営利の第3セクターとしてニュージーランドでもボランティアの活動が重みをもってきています。

## (2) クライストチャーチのコミュニティハウス

クライストチャーチ市では、地域の様々なボランティア活動を支えるために、市の行政機関と市民の募金によって、運営されている地域活動組織のコミュニティハウスがあります。それぞれのボランティア団体や非営利組織が、このコミュニティハウスの施設をレンタルで事務所として利用しているのです。

利用する団体は、社会や地域が必要とするグループのサービス活動で、福祉活動から様々な地域活動を行うボランティア組織です。このハウスに事務所をもつグループは、市民を助けるための活動をしています。そして、スタッフが8時半から5時まで常駐していますが、すべてのグループのスタッフがいるわけではありません。

コミュニティハウスでは、それぞれのグループの活動を継続的に保障するために事務所の提供をしているのです。この事務所で活動するボランティア組織は、市民の自発的な意識でつくられたもので、小さなグループ的組織が中心です。市民のボランティア活動が自由に活動できるように、事務所、会議室、セミナー室、コピー・ファックス室、新規のボランティアメンバーのサービス、ボランティア活動の募集、情報の提供コーナー、ボランティア活動の相談室などを設けています。ボランティア活動がスムーズにいくための必要な条件をコミュニティハウスが提供しているのです。

ボランティアグループは、一人親の子どもの支援の組織、病気や体の弱い子どもの援助をする組織、家計のことでアドバイスサービスをする組織、心身に機能的なハンデキャップをもつ人々への支援組織、若い労働者の地域への関与支援、学童保育のネットワーク、女性の地域活動組織など、様々な団体がこのコミュニティハウスを拠点として、活動を展開しています。

そして、クライストチャーチのボランティアセンターは、個々人が興味をもつボランティア組織や非営利の組織についてのサポートと情報提供を

し、ボランティア活動のトレーニングをしています。つまり、ボランティア活動をしていくうえで問題になるすべてについて弁護と相談をしているのです。そして、地域からのボランティア活動の情報センター的役割を果たしているのです。

社会的サービス協議会は、社会的サービスを含む機関や地域のボランティアのための方策をつくり、様々な機関やグループとの連絡活動をしています。そして、地方政府とボランティアグループとのあいだのコミュニケーションの流れの役割をしています。

カンタベリー地方のボランティアセンターの評議委員、ニュージーランド社会的サービス評議会の議長、元ニュージーランド労働者教育協会連合の会長など様々な社会活動を勤めるカセリン・ピートさんは、わたしとのインタビューで、ボランティア活動領域を政府行政領域、経済活動領域と並んで、今後の未来を考えていくうえで、重要な社会的セクターであると強調しています。

それぞれの領域が独自の役割を發揮して、相互に協力していく未来社会を展望していきます。しかし、ニュージーランドの現状は、ボランティア活動の社会的勢力はきわめて弱く、ビジネスの領域が拡大し、政府もその領域に従属してきているとピートさんはのべます。また、失業者が増大し、社会的矛盾も拡大し、人々の経済的格差も富めるものと貧困層とに分かれていくと指摘します。また、職業を得るための、貧困な地域の経済発展のための成人教育や若いひとたちの地域教育の必要性を強調していました。

ニュージーランドの労働者教育協会の連合は、持続的な世界のための労働の提言を積極的にうちだしています。実現可能な自然環境、コミュニティを大切にす社会、生活に必要な十分な経済と3つのセクターが相互に大切にされながら絡み合っていることが持続可能な発展であるとしています。ここでは、よりよい生活を大切にしたい地域経済の発展が大切であるとピートさんはのべます。

労働者教育協会は、政府からも組合からも自立した組織です。労働者教育協会は、組合と一緒に企画をたてることもあります。それはきわめてゆるやかな関係で従属したものでは決してありま

せん。労働者教育協会に労働組合はメンバーになっていません。労働者教育協会は政府から資金援助を一部受けていますが、しかしすべてではありません。

この労働者教育協会は、労働者の自立のために積極的な教育活動を展開していますが、1999年の場合、2月から4月までの3ヶ月に、昼間のコース18、夜のコース12コース、セミナー・イベント9と合計38のプロジェクトをもって活動しています。

### (3) パーマストンノース市のオープンラーニングセンター

パーマストンノース市では、ボランティアの活動家を中心となって、オープンラーニングセンターという成人教育の活動組織があります。この組織の事務所には、常駐の6名のボランティア活動家（報酬は週21ドルということで、交通費にもならない程度の金額）、有償の1名の常駐者、プログラムごとに活動を支えるパートのボランティア45名の活動家によって、組織が運営されています。この45名の人は、電話番号として半日手伝うだけの人や、特定のプログラムについて分担することなど様々です。報酬は、半日5ドル程度でバス代や駐車料ぐらいにしかありません。

ここでのオープンラーニングセンターは、大学の開放教育や学校が通信教育を行う成人のためのオープンラーニングという意味ではありません。貧困問題や差別の問題を地域的レベルで解決していくための学習活動センターという意味です。

活動は、中心的なものとして、8つのプログラムとオープンラーニングセンター内に事務所をもつ7つの組織によって、ボランティアを重視した日常的な市民の生活に根づいた学習活動がやられています。また、市立図書館や様々な外部団体とも積極的に連携活動をしての学習活動をしているのも特徴的です。

このラーニングセンターが生まれた契機は、もともと識字教育やDP者の教育に関わっていた女性たちが、1991年に政府の福祉施策の契約的資金がうち切られたことによって、試験的にはじめられたものです。資金は、当初、中等教育学校であるクイーン・エリザベス・カレッジの成人教育

予算の一部の資金提供によって行われました。その中等教育学校からは、成人教育の講師料が提供されることになりました。

このプログラムは大きな成功をおさめ社会的にも高く評価されました。ぜひ続けてほしいという市民の強い要望のもとに、市役所とも交渉して、事務所と会議室として、市立図書館の大会議室を借りることができました。ラーニングセンターとして、地域の学習調査などをして、ボランティアのための市民の学習要望の強いことがはっきり示されました。現在は図書館の近くのビルのひとつのフロアを借りています。場所が広いので、オープンラーニングセンターと直接関わってきたボランティア団体の事務所もここに 있습니다。それらは、内部のパートナー組織として、日常的な活動の連携をしているのです。

ラーニングセンターの活動をはじめめるにあたって、理念をはっきりさせることが必要ということで、マオリの識字教育を重要な柱にしました。それは、マオリの人たちは、この国の先住民族であるとうことからです。

イギリス人をはじめ様々な民族のひとたちが、その後に住みついたということで、マオリ語でタウウィとよんでいます。マオリのひとたちの合意を得て、国づくりをしていけば、あらゆる人々の合意ができるという考えからです。

つまり、マオリの教育を重視していくことは、ニュージーランドのあらゆる人々の人権についての普遍性をもつということからです。マオリのひとたちは、先住民でありながら、貧困と差別に悩んでいるのです。マオリの人たちの言語や文化を大切にしたい教育をラーニングセンターは重要視してきたのです。

全国的に識字教育が展開されていますが、こちらでは、マオリの言語と文化を大切にしたいのです。とくに、マオリの人々に開かれたスペースは、ニュージーランドのすべての人々に開かれているという意味です。ここで、提供されるサービスは、学習者たちに費用がかからないということで、誰にも開かれているという2つの意味があります。したがって、ショートステイでパーマストンノース市にきた人たちにも学習機会を提供しま

す。

学習内容は、それぞれの人々のニーズにあわせてとりこんでいきますが、社会や地域生活で役にたつような内容を大切にしています。チューターは学習者のニュースに答えるように学習計画をたてていきます。ここでのコアのプログラムは、マオリの識字・文化の学習以外に、英語学習グループ、女性の識字教育、ボランティアのトレーニング、自動車の安全教育、運転免許教育、コンピューター教育を実施しています。

コンピューター学習は、最初は操作のしかた、道具としての利用のしかた、コンピューターをワープロとして使用して、サークルの記録、家族の歴史や日記をつけることなどをしてしています。さらに、ホームページ・電子メールの使用方法などを学習しています。

コンピューターの講座は、仕事のない人のための訓練ということで、専門的に常勤一人が配置されていますが、訓練を受けた人たちが職場について、自信がもてるようになったという報告がされています。

パートなどの仕事もコンピューターの訓練を受講してみつかっている事例もあります。また、仕事だけではなく、家計簿やワープロがうてるようになったということで、手書きから解放されて容易に文章がかけられるようになったということが生まれ、様々な活動に大変役にたっています。

ワープロが使えることになったことで、コミュニティやグループのニュースも容易に発行できるようになりました。このため、ボランティア活動などの情報に大きな貢献をしています。また、月1回のコミュニティ・マナワツという地方の情報新聞もこちらでつくっています。自信をつけて、社会的な仕事をつくりだしています。また、自分たちの活動を記録して出版したり、文集をつくらしているのに役にたっています。

オープンラーニングセンターにきて学習し、生活能力を身につけて自信をもち、大学やポリテクニクにいくとか、なかには、積極的に仕事を見つけることにチャレンジして、銀行からローンが認められたという事例もでてきています。

オープンラーニングセンターは、マオリの言語

や文化を大切にしてきたということからも、ニュージーランドでは、少数民族になる言語教育も積極的にやっています。例えば、他で提供していないオランダ語やアラビア語の提供がその典型です。

パーマストーンノース市には、トンガの家族が現在50世帯いますが、その子どもたちに読み書きの学習、大人が本を読んであげる活動、絵を描く時間などをつくっています。子どもたちの憩いの時間と場になるように工夫されています。

この活動には、4人のボランティア活動家が26人の子どもの世話をしています。大人だけでは、なかなか人との交流がむずかしかったのが、子どもをとおして一層トンガの人たちが連帯を深めて、ボランティアを媒介にして、地域社会にとけ込んでいっているのです。

オープンラーニングセンターのボランティアトレーニングは、内部の組織のボランティアの学習活動も重要性をもっていますが、地域ボランティア組織には、こちらから講師を送り出しています。98年度は27名の学習援助者を地域に派遣しています。費用もオープンラーニングセンターでもっています。99年4月にあったボランティアトレーニングの講座は、ストレスによる心身の疲労をさけるための講習会でした。

そこでは、自分自身がリラックスする方法、過労の人の毎日の仕事を考え直すための援助活動などを学んでいます。ニュージーランドでも職場において、一部ですが競争主義の能力主義管理、時間管理方式の経営が導入されて、人間関係のまずさやストレスの増大が生まれています。

ニュージーランドでは、10時と3時にティタイムという休憩時間が職場のなかに一般的にありますが、能力主義的な時間管理のなかで難しさも生まれているところもあります。激しい労働のなかで、長時間働く職場もなかにはあります。子どもの面倒をみる時間のない家庭も増えています。

オープンラーニングセンターの常駐のボランティア活動家は、わたしとのインタビューで日本は相当ひどいのではないかとということで、日本のように過労死がたくさんでることのないように住民運動をしていますとのべていました。アメリカ式

の能力主義的な時間管理の経営方式は、ニュージーランドでも大きな社会問題になりつつあるようです。

また、ボランティアの人たちも社会的正義から熱心になりすぎて、ストレスをためてしまうこともあります。ボランティアの人は、他人のために自己犠牲的になって、過労で体がボロボロになることもありますので、十分注意して、ボランティア活動をするようにしています。

若い人たちの自殺が増えているのが最近のニュージーランドの新しい動きです。若い人が就職がなく、借金をためて将来に対する自信を失っているのです。とくに、ニュージーランドは大学の授業料は、以前は無料でしたが、最近、文系の場合でも年間4千ドルとうことで高額になり、学生たちは、特別のローンを組んで大学に入学します。就職がないということは、将来の不安と同時に、すぐに経済的な問題に悩まされるのです。

楽しいパーティを積極的に企画して、ストレスをためないようなボランティア活動が重要性もっていますとオープンラーニングセンターの活動家は語ります。コミュニティワーカーとしても新しい事態に対して、積極的に対応できるような講習会を行っているのです。

ラーニングセンターの内部の7つのパートナーシップの組織団体で、地域のボランティア活動と異なる職場の学習グループがあります。これは、地域の小さな企業経営主から委嘱されて働いている人と経営者がともに学ぶ活動を展開しています。仕事は、人々が自己の生き甲斐のなかで目標をもってするというで、時間を管理するというのではなく、仕事の時間を与えるということでの手伝いをしています。

オープンラーニングセンターにきて、週1回の1対1の読み書きをしている人たちもいます。ラーニングセンターでは、運転免許をもっていますが、さらに、事故がないようにと安全講習などを行い、優良運転免許の訓練をしています。職場単位でもスーパーの経営者が働いている人の教育を依頼してくるケースも生まれてきています。その経営者も地域に利益の一部を還元していく大切さを学んでいるのです。

いままで、一般的に企業内で経営主が行っていた企業訓練は、働いている人の要望にそって学習が組まれていなかったので、ラーニングセンターが行う学習方式は、働いている人からも経営者からも喜ばれている状況です。働いている人の人格を尊重して、職業的技術も保障して、やる気をおこさせるような企業内の教育活動の重要性を、この活動をとおして、オープンラーニングセンターのスタッフは認識したとのべています。地域レベルで共に学んでいくという動きがニュージーランドにもみられるのです。この援助をオープンラーニングセンターのボランティアがしているのです。

様々な地域の要望に応じて学習活動を展開していますが、最大の問題は予算が少ないということです。オープンラーニングセンターは、現在、305平方メートルの事務所を借りています。そこには、4つの部屋があります。民間のビル会社から事務所として間借りしていますが、家賃は、3分の2が市役所が支払ってくれていますが、3分の1は、自分たちで経費をつくらなければなりません。

98年のオープンラーニングセンターの収入が147799ドルで、支出が154077ドルと赤字になっています。事務所として、もちこたえることができるかどうか厳しい状況にたたされています。ボランティア活動を進めていくうえで、予算の問題が大きな弱点なのです。予算問題で活動を縮小しなければならない事態もあると、オープンラーニングセンターのリーダーたちは語ります。

地域の要望が強まれば、企画も増えていきます。しかし、無報酬に依存してのボランティアでは限界にきているのが現状です。予算が増えれば、さらに、社会に貢献できる多くの学習活動が展開できるとスタッフたちはのべていました。

### 第3章 コミュニティラーニングセンター

#### (1) コミュニティラーニングセンターの成人教育での位置づけ

ニュージーランドの成人教育では中等教育学校での成人教育部が大きな役割を果たしていますが、生徒が日常的に学んでいる学校敷地内とは別に、学校から離れた地域に独自にコミュニティセ

ンターという施設を設けているところも少なくありません。施設は、中等教育学校や地域住民によって管理運営されていますが、専門の職員も配置して、地域学習と地域の文化・レクリエーション活動を積極的に展開しているのです。

ニュージーランドの11の地域のコミュニティセンターの歴史的な具体的実態調査の報告が、1979年に成人教育の国民評議会からだされています。ニュージーランドでは、コミュニティセンターという場合、歴史的な経過において、地域の成人教育と文化施設の側面を強くもって形成されてきたと指摘されています。

それは、学校との関係を強くもちながらから発展してきたということからです。この意味で農村にある地域の集会施設や社会的サービス活動の拠点的機能の強いビレッジホールとは性格を異にするものです。また、ニュージーランドでは、伝統的に地域共同体の絆に大きな役割をもつ集会施設として、マオリの「マラエ」がありますが、それとも異なるものと指摘しています。

現在は、コミュニティラーニングセンターとして、名称をつけているフィールディングの地域成人教育施設は、全国的にも地域成人教育と文化活動のための施設づくりに大きな影響を与えたものです。フィールディングの街は、ニュージーランドの北島の南部地域の農村の市街地で、マッセイ大学のあるパーマストンノース市から車で30分ほどの隣の町です。

このラーニングセンターは、地域の学習者や文化レクリエーション活動をする人々の住民評議会が管理運営をし、学校とは全く離れた場所にコミュニティラーニングセンターという成人教育・文化活動のための施設をもっているのです。

この教育文化施設は、日本の公民館の形態に非常に似ていますが、ラーニングセンターの管理運営が教育委員会ではなく、学習者を中心とする住民評議会、農業高校がバックアップしているということで、地域住民の学習者や文化レクリエーション活動家によって、支えられているということで、日本と大きな違いがあります。制度的に独自にコミュニティラーニングセンターの予算のしくみが確立していないなかで、財政的な面からラー

ニングセンターの危機が戦後などかありますが、教育省との交渉のなかで予算の確保をしてくれているのです。

ラーニングセンターは教育省の予算で運営していますので、教育機関としての性格をもっています。したがって、コミュニティホームやコミュニティレクレーションセンターなどの地域の様々な集会のためにつくられた施設とは性格が異なります。もちろん、それらの地域集会施設においても学習・文化活動は積極的にやられています。コミュニティラーニングセンターは、成人の学習のための施設で図書室や専門の学習を援助したり、コーディネーターの役割をするディレクターが教育職として配属されているのです。

ワンガヌイ市、マスタートン街などの地域は、ポリテクニクという中等教育学校を終わった段階の専門学校がコミュニティラーニングセンターを管理しています。そこでは、ポリテクニクと隣接したところに学習のための会館や事務所をつくっています。ニュージーランドの成人教育を考えていくうえで、このラーニングセンターの形態は、日本の公民館と比較した場合に、注目すべき地域成人学習施設です。

フィールディングのラーニングセンターは、日本の公民館の歴史よりも古く、戦前の1938年に農業高校の地域成人教育施設として出発したものでした。地域住民による教育内容や運営の審議会は、センターがつくられると、まもなく結成されていますが、それは、学校教育の延長としての地域教育施設ではなく、住民の学習要求を中心にしてつくられ、また、学校教育とは、独自に専門の成人教育のディレクターが配属されたのも特徴的です。

## (2) コミュニティラーニングセンター形成の歴史的経過

### －フィールディングの事例－

フィールディングのコミュニティラーニングセンターは、ニュージーランドでも古くからある地域学習センターです。このコミュニティラーニングセンターは、フィールディング農業高校の成人教育として構想されたものです。コミュニティラーニングセンターは、農業高校施設ではなく、街の

中心に学習センターをつくり、フィールディングの街と広大な農村地域を結びつけるために企画されたという特徴をもっています。

フィールディング農業高校の校長ワイルド氏は、街と農村の統一を考えていました。学校をとおして、民主主義的に自分たち自身で地域を治める教養ということで、責任ある市民教養の教育を実施していました。とくに、農村と街の異なる環境の地域生活を教育をとおして、実践的に一致させようとしたのです。

同時に広い視野を身につけるために、具体的に地域での成人教育を展開することが必要であったのです。この農業高校の校長ワイルド氏の要請に応じて、サマーセット夫妻は、地域教育活動の推進のため、フィールディングに招かれたのです。サマーセット夫妻とワイルド氏は、カーネギ財団の援助で、世界の教育視察の経験をもっていました。かれらは、イギリス、デンマークなどヨーロッパ、アメリカ合衆国に訪問し、地域教育運動のリーダーとコンタクトをとっていたのです。

サマーセット氏は、フィールディングのコミュニティセンターのディレクターとして招かれましたが、夫妻は農業高校のスタッフとして任命されたのです。これは、コミュニティセンターのディレクターを公教育のなかで位置づけられるために、積極的にとられた措置でした。

フィールディングのコミュニティセンターは、地域の成人学習のための施設の充実として、出発したものでした。建物は2階で、2つのブロックからなっていましたが、農業高等学校のテクニカルスクールの建物を改造して利用したのです。

さらに、コミュニティセンターとは、別の場所にあった農業高校の古い木工室を利用して、演劇などの芸術活動や木工創作活動をしたのでした。その後に演劇活動などの芸術活動は、コミュニティセンターと隣接したところに劇場ができたので、そこで、自由に活動ができるようになったのです。

コミュニティセンターには、多様な活動のために使用する2つの大きな部屋がありました。さらに、事務所と図書室の2つの小さな部屋がありました。中2階には倉庫が準備され、廊下を簡単に

改造して台所とお茶が飲める部屋をつかったのです。部屋は快適にするために、空気のとおしをよくして、冬はヒーターが十分にきくようになっていました。コミュニティセンターは農業高校の所有として管理されたのです。

農村における民主主義の成人教育活動を進めていくうえで、世界の様々な事件について、議論していくフォーラムの学習形態をもったことは、フィールデングのコミュニティセンターの大きな特徴でした。

1938年は国際的に戦争が生まれていたときです。国際的な事件の問題は、民主主義にとって大きな課題であったのです。公開でフォーラムを開き、そのときどきのトピックスのニュースを語りました。自由、民主主義を考えることはコミュニティセンターにとっても大きな仕事ということから、サマーセット氏も力をいれていました。

1947年に、日本の広島原爆投下問題について、大量破壊兵器の問題をヒューマンイズムの視点からフィールデングコミュニティラーニングセンターで議論した経験が書かれています。そこでの人々の大きな関心は、原爆と人間の生存に対することであったのです。「われわれは、未来の核戦争にのろわれているということです。核のエネルギーは、すべての人々に社会的効果をもっていることに認識するようになるであろう。生きることと学習するといことを考えるようになることは、一般の人々も考えなければならなくなるという新たな発展が核問題のことから、よくみられることであろう」とサマーセット氏は記録しています。

さらに、かれは、センターの位置づけについて次のようにのべます。「コミュニティセンターは、精神や情操のこころの発達、コミュニティにむけられています。それは、合理的な発達として開かれておりますし、センターの活動の範囲は、人間の生存ということから広がっています。センターは、コミュニティの生存のための真理を求め、この地上で共に生きていくために、もっともベストな方法を、協同で人々が探求していく場であるのです」と。

フィールデング地方にも、様々なボランティア組織がありました。農村婦人の組織、若い農民の

クラブ、イギリス音楽協会、スポーツクラブ、いくつかの教会クラブ、ボーイスカウト、ガールガイドなどがありました。コミュニティセンターができる以前は、クラブはそれぞれの家庭で行われていて、集まるのには不自由をもっていました。

地域の組織は、いつでも気軽に集まれるコミュニティセンターが必要であったのです。また、センターは、街と農村を結びつけるということで、農業高校の敷地とは別に、フィールデングの中心街の鉄道駅近くの場所の農業高校の施設に目がむけられたのです。

当初は、料理教室、木工教室、絵画教室、詩の教室などを設けましたが、労働者教育協会の組織の必要性を考えて、そのための講義や議論を実施しました。労働者教育協会は、1938年に設立されています。演劇グループも、この年に生まれています。翌年に、音楽の協会、若い農民のグループなどが誕生していきます。

そして、サマーセット婦人は、7歳と4歳の男の子の母親でしたが、精力的に活動し、フィールデングに子どものためのプレイセンターを1939年に設けています。子どもの家がスターする1年間は、自分の子どもの世話も大変でしたので、信頼できる家政婦が面倒をみえています。

子どものためのプレイセンターをつくることによって、幼い子どもの世話と親の教育をはじめたのです。農村の女性組織に入っている人々は、サマーセット婦人から子育てのことなどを学び、地域の集会を開いていくのです。毎週、親のための講座を開きましたが、親自身もプレイセンターの運営のための会議を毎月開き、そこで、独自にゲストの講師を招いて学習していくのでした。

そして、プレイセンターからはじまった利用者主体の運営参加、住民参加の方式が、コミュニティセンター全体の管理運営の方式に発展していったのでした。つまり、センターを利用している街と農村の住民を主体にして、1945年にコミュニティセンターの評議会の形成をみるのでした。（歴史的経過の詳しい内容、コミュニティセンターを創設したリーダーのワイルド氏とサマーセット氏の教育思想については、1999年度の鹿児島大学教育学部紀要・教育学編に掲載予定）

### (3) フィールディングラーニングセンターの活動の現状

歴史的に地域民主主義、地域ボランティアの養成、子どもの発達のための親子教室など伝統をもっていたフィールディングのコミュニティラーニングセンターは、中心的に活動を担っていたサマーセット氏夫妻が1948年に去ったあとも、継続して、現代まで専門のディレクターが配属されていますが、時代とともにその内容は大きく変わっています。しかし、ディレクターによる地域の成人学習の企画、指導はわかりません。

現在のコミュニティラーニングセンターの講師料2000時間は、教育省から予算配分されています。また、全体の講座講師料の15%は、コミュニティグループに予算が割り当てられています。その予算は、様々なボランティアグループの養成に使われているのです。

コミュニティセンターの建物の所有権は、1960年代の後半に、農業高校の建物から地方評議会のものに変わりました。交渉は、移譲される2、3年前から行われていたのです。多くの地域のグループ組織は、コミュニティセンターの建物の部屋を借りていたのです。

学習活動の多くは、農業高校で実施していた形態をとっていたのです。駅舎は、芸術活動のセンターでありました。焼きもののように特別の備品のために、コミュニティセンターに部屋の料金を支払っていました。コミュニティセンターの専任職員の賃金は、教育省から配分される講師料のなかから支払っています。コミュニティラーニングセンターのアドバイザー委員会は、地域の住民代表と講師の代表から構成されています。

1970年にコミュニティのために準備されていた農業高校は、7年生と8年生を設けました。コミュニティラーニングセンターは、学校から離れていく歴史的な背景があったのです。コミュニティラーニングセンターのプログラムは、パートタイムのスタッフで運営されていました。

ニュージーランドでは、多くの学校が、地域の教育のために時間をさかねばならないようになっています。学校から独立して独自にコミュニティラーニングセンターの運営をしているのは、他に

も数多くあります。ニュージーランドでは、学校教育の仕事として、地域成人教育が発展していったのです。この意味では、フィールディングのコミュニティラーニングセンターは、学校教育組織から分離していくという特殊な展開をもっていったのです。

農村においては、地域教育活動は大変困難であったのです。農村の人々の地域教育活動の努力は、自己防衛上に必要なことで、生きていくうえで学習は大切なことであったのです。多くの農村婦人はコミュニティラーニングセンターの活動をとおして、ただ働くだけでなく、街に来て、楽しみをもつことができました。ラーニングセンターの存在によって農村の地域も多くの変化をもたらしたのです。

フィールディングのコミュニティラーニングセンターは、1999年時において、2人の専門職員によって狙われています。彼らは、地域の文化・学習活動の企画運営、地域組織のコーディネーター、講座の事務などを行っています。

建物は、1948年の戦後まもない時期に改造した施設を現在も利用していますので、老朽化が進んでいます。また、街の図書館、アートセンター、体育館も別のゾーンに地方行政の役所によって、立派なものが建てられており、コミュニティラーニングセンターが唯一の地域の学習・文化・レクリエーションの施設であった時代からみると、施設の分散化がみられます。

コミュニティラーニングセンターの講座も、ラーニングセンター以外に、農業高校、アートセンター、それぞれのグループごとが行うコミュニティホームなどの施設などになっています。

コミュニティセンターが実施する1999年の2月から6月の講座案内は次のようになっています。金融講座が毎週の月曜日の7時から9時まで受講料月71ドル（1ドル約65円99年3月段階）、コンピューターの基礎、月曜日から金曜日の6時半から8時、2月と4月、受講料月53ドルです。

コンピューターの入門が10講座で、毎週で1時間半。ウインドウズの利用など20講座となっています。それぞれの受講料金は月で50ドルから70ドル前後になっていますが、コンピューター関係は

大変人気のある学習講座になっています。

コミュニケーションの講座は、12教室ありますが、マオリ語、旅のイタリア語、手話、英語の作文などとなっています。健康のための講座は、ヨガ4室、マッサージ法、アロマセラピーなどの7教室です。

料理教室は、5教室、ハーブは、2教室となっています。アウトドアの講座としては、庭園の手入れ、フィッシング、ボート・ヨット、VHFラジオの資格となっています。

アート教室は、フラワーアート、インテリアデザイン、写真、絵画、手芸、木工、焼き物陶芸などとなっています。アート教室は、全部で31講座と最も多くなっています。

健康教室やアート教室の受講料金は、すべて有料で、20ドルから80ドルの幅で講座の時間数に応じて徴収しているのです。

就学前の子どものための講座は、2つの教室がありますが、陶芸教室とダンス教室です。これらの講座の内容をみるかぎり、コンピューターやコミュニケーションなどの講座を除いては、文化・レクリエーション的な教室が多数を占めています。地域の民主主義や地域ボランティアの養成、地域の子どものためのコミュニティラーニングセンターの学習の役割も時代とともに、大きく変遷してきていることがわかります。

#### (4) ワンガヌイ市のコミュニティ教育サービスセンター

ワンガヌイ市の成人教育センターは、ポリテクニクという高等専門学校が管理責任になって講座を開いています。成人の教育講座の経営・運営は、住民による委員会方式で行われています。

日本の成人教育の現状について住民委員会のメンバーが知りたいということで、ワンガヌイ市のコミュニティ教育センターによばれて話をしましたが、日本の文部省が成人教育のための教育行政を整備し、予算と施設、専門のスタッフをフルタイムできちんとおいていることに、大きな驚きと関心を示していました。

ニュージーランドでは、成人教育のためのセンターは、講座の企画運営、地域ボランティア組織のコーディネーターとして、2人の専門の職員が

配置されていますが、フルタイムではなく、教育省から配分されたパートタイムの予算と講師料、そして講座の受講料のなかで、職員の給料、管理運営費をまかなっていかねばなりません。ワンガヌイ市では、教育省からの成人教育のためのセンターの予算がポリテクニクをとおして配分されてくるのです。

センターの施設は、ポリテクニクのもので、建物の維持管理の責任をもっています。専門職員の給料もポリテクニクが支払っているのです。歴史的にワンガヌイ市は、中等学校ではなく、ポリテクニクが地域の成人教育のセンターの役割を果たしてきたのです。

地域の成人教育センターは、ワンガヌイ市役所からの財政的な援助は受けていないのです。地域の成人教育は、政府の財政と監督に大きく依存しています。政府は、コミュニティの教育の財政は、フルタイムの生徒に基本的にあるという立場です。政府は、成人教育の管理の方法を地域グループの学習ということから、仕事のためのということに変えています。

ワンガヌイ市のコミュニティ教育のサービスセンターは、コンピューター講座（2教室）、料理教室（2教室）、教養講座（1教室）、絵画・木工などの芸術創作活動（9教室）、健康（6教室）、マオリ語・フランス語・イタリア語などの入門語学（3教室）、手話学習（3教室）などが行われています。それぞれ、受講料は、時間数と材料費などの条件によって設定していますが、20ドルから85ドルとなっています。これらの講座は、2回から8回程度の短期の教室になっています。

長期の職業養成や資格制度と結びつくようなビジネス講座、コンピューター資格拾得講座、ガラスデザイン、ファッションデザイン、理髪、大工、造園業、会計、事務業など様々な資格制度と結んで、パートタイムとフルタイムの学生募集を成人に対してもやっているのですが、これらは、ポリテクニクの学校の仕事として、教室を開いています。

また、就学前の親子教室、子どもの学習については、別にチャイルドケアセンターで実施しています。センターで子どもを遊ぶ料金は、半日

13ドル、1日24ドル、一週間110ドルとなっています。また、朝と午後のおやつや昼食は親が子どもにもたせるようにしています。

ポリテクニクの行っているコミュニティ教育のサービスは、地域の成人の趣味やレクリエーションなどの文化活動に貢献していますが、地域の民主主義形成のための教養講座や環境問題などの地域課題を解決するための成人学習は実施されていないのが現実です。これは、地域のラーニングセンターが文化活動を事業として考えるようになり、事業収入を大切にした結果です。地域生活と結びついたところは、地域のボランティアによる学習活動が大きな役割を果たしているのです。

### 参考文献

- 日本ニュージーランド学会編「ニュージーランド入門」慶応義塾大学出版会、1999年
- 青柳まちこ編「もっと知りたいニュージーランド」弘文堂、1997年
- PALMERSTON NORTH CITY COUNCIL (1995) : EDUCATION POLLCIES, palmerston north city council
- John Benseman, Brian Findsen and Miriama Scott (1996) : The Fourth Sector : Adult and Community Education in Aotearoa / New Zealand, The Dummore Press, Palmerston North New Zealand
- Claudia Bell (1997) : Community Issues in New Zealand, The Dummore Press, Palmerston North New Zealand
- Feildig Community Centre Golden Jubilee Committee (1988) : FEILDING COMMUNITY CENTRE 1938-1988, Feildig Community Centre Golden Jubilee Committee
- Ministry of Education (1998) : TERTIARY EDUCATION IN NEW ZEWLAND, Ministry of Education
- J. C. DAKIN (1979) : THE COMMUNITY CENTRE STORY, National Council of Adult Educatin